

猿の群れから共和国まで

丘 浅次郎

一 歴史と生物学

アメリカやヨーロッパには数多くの共和国がある、人類が初め猿類と共同の祖先から起つたものとするれば、これ等の共和国も遠い昔まで遡れば猿の群の様なものであつたに違いない、それから長い年月の間に次第次第に変遷して終に今日の状態に達したのである。次に述べる所は生物学から見たこの変遷の大略である。



抑も国の変遷を調べることは、従来の学問の別け方に従えば全く歴史の領分に属する。従つて、アメリカやヨーロッパの共和国の過去を論ずるのは当然歴史家の仕事であつて、生物学などとは何ら関係が無い如くに思つて居る人が多い。所が、私の考えによれば、これは大きな間違いで、凡そ人類の団体の変遷を論ずるに當つては、先ずこれを生物学的に観察することが何よりも必要である。生物学的に見るとは即ち人類を生物の一種と見做し、その団体の変遷を論ずるに當つても絶えず他の動物の団体と比較しながら考えを進めて行くことである。而して生物学的に考える場合には、従来の所謂歴史上の事実を一一参考する必要は少しもない、ただ大体の変化だけを承知して居れば、それで宜しい。私が今この文を書き綴るに當つて歴史の書物

の一頁をも読まぬのは、実はその必要を認めないからである。



「樹を見る者は森を見ず」という諺が西洋にあるが実際一本一本の樹を丁寧調べて居る様なことでは森全体の様子は到底分らぬ。また「廬山に入つては廬山を見ず」などともいうて、自身が山の中に居つては、その山全体の姿は無論見る訳に行かぬ。普通の歴史では自身が人類団体の内にあつて、その一員として団体内から見る故、何年の何月何日に何の某が何所で何をしたとかいふ様な細かいことにはよく気が附くが、団体の全部が大きく緩やかに変遷して行くことには心附かずに居る。その有様は恰も一本一本の樹を調べて森全体のことを知らずに居るのに均しい。これに反して生物学的の見方では、他の動物の団体生活を背景とした舞台の中央に人類の団体を据え、自分は遠く離れた棧敷から見物して居る心持ちで眺める故、細かいことは無論何も見えぬが全体としての姿はよく知れる。それは丁度少しく距った所から見ると森全体の形がよく知れるのと同じ理窟である。斯様に比べて見ると、普通の歴史は目の細かい網で雑魚を掬うて居る様なもの、生物学的の見方は粗い太い網で鯨を捕えようとする様なもので、両方とも同じく何物かを獲ようとするのではあるが、粗い細かいに非常の相違があるから、粗い方を目的とする場合には細かい方は眼中に置くに及ばぬ。今私がアメリカやヨーロッパの共和国の過去を生物学的に論ずるに当つて所謂歴史上の事実を度外視するのは、恰も雑魚が鯨網の目を泳ぎ抜けるのを構わずに置くのと同じ心持ちである。

二 猿の生活(上)

先ず猿の群の生活状態から考えて見よう。一口に猿というても、その中には色々の種類があつて生活の模

様も決して一様ではない、ゴリラや猩々しやうじやうの如きごと大きな強い猿は多数に集まって群体を造る必要もなく、従つて實際造りもせぬが、他の種類では多くは一定数の猿が一団体となり、餌を取るにも敵と戦うにも常に力を協あわせて共同の生活を営んで居る、此所に述べるのは斯かよう様な団体生活を営む普通の猿類の生活状態である。

◇

猿類は大概数十疋または数百疋が集まって一団体となり、各団体には必ず一疋の大將があつて、総すべての者は皆絶対とその命令に服従して居る、猿類の産する地方では斯かよう様な団体が数多く並び住んで、或は他種の動物の攻撃を防いだり、或は同種類の他の団体と戦うたりして日を暮して居るのである。

◇

猿の団体を見て第一に気の附くのは協力一致のよく行われて居ることである。協力一致は団体生活に必要な条件で、これが行われなければ団体生活は全くなり立たぬから、苟いやしくも団体生活を営む動物である以上は、或る程度の協力一致の行われぬものはない。猿の団体の如ごときも、何十疋何百疋のものが、悉こしごとく全団体の共同の目的のために力を協あわせて共に働き、弱い者を助け幼い者を導いて、決して自身一己のために我儘わがままな振舞ふるまいをする者はない。特に怪我でもした者のある場合には他の者が集まって非常に親切に世話をする。また万一、自己一己の利益のために団体全部の利益と撞ぶつ着ちやくするようなことを敢あえてする者があれば、大將は厳しくこれを罰ほとんして殆ど半殺しの目に合わせる故、一度で懲こりて決して二度とはせぬ、斯かよう様な次第で、一は生れながらの本能により、一は生れた後の訓練により協力一致がよく行われるが、これは敵なる団体と戦うに当っては何よりの強味である、協力一致の性質が十分に発達した団体では身体は百あつても心は一つであるが、この性質の劣つた団体では百の身体には百の心がある故、相対して戦う場合に何いすれが勝を得るか態々わざわざ論ずるまでも

ない。されば猿類の有するこの性質は、長い年月の間、団体間の生存競争が絶えず行われた結果として、自然淘汰によつて次第に築き上げられたものと思われる。

二 猿の生活 (下)

次に猿類の団体で著しく目に附くのは絶対服従の性質である。これは協力一致の実を挙げるための手段とも見做すべきもので、団体が全部一致して最も有効に働き得るのは、猿の一疋毎にこの性質が備わつてあるに因る。前にも述べた通り、猿の各団体には必ず一疋の大将が控えて居るが、総ての者が絶対に彼の命令に服従すれば、団体の働きはいうまでもなく全部一致する。即ち身体の数に幾つあつても、悉く大将の意志に従うてその手足の様に動けば、団体は恰も大きな一疋の如くに敏捷に立ち廻ることが出来るが、この事は進んで敵を攻めるに當つても、止まつて自身を守るに當つても非常に有利である。各自が服従すれば団体の行動が一致し、団体の行動が一致すれば敵なる団体に対して勝つことが出来る。敵に勝てば自分の団体は利益を得るが、団体が利益を得れば、その一員たる自分も利益に与かることになる。斯様な次第で、各自が服従性を備えることは、結局、団体の生存上、大に有利である故、団体間の生存競争が長い間引き続けば、自然淘汰の働きによつて、この性質は一步一步発達し行くものと考えねばならぬ。猿類の今日有する服従性は恐らく斯くして生じたものであろう。



猿の各団体には必ず一疋の大将があることは已に前に述べたが、如何なる一疋が大将になるかというに、これは何時も全団体の中で牙が最も鋭く、腕が最も強く、最も経験に富み、最も戦術に巧な者に限られる。即

ち実力の最も優れた者でなければ大将になれぬから、事実、年長の牡が成るに極まって居る。而も万一服従を肯ぜぬ者が生じた場合には、牙と腕とによつて服従を余儀なくせしめるだけの力がなければ大将の役は務まらぬから、苟且にも部下の者から鼎の軽重を問われる様では到底その資格はない。猿の団体は常に斯様な智勇兼備、精力絶倫の大將を上戴着居るのであるが、これがまた彼らの団体生活に取つては最も有利な制度である。昆虫などの様な本能のみによつて万事を行う動物では、生れた後の経験によつて生活の能率が進むということがないから、斯様な動物が団体生活を営む場合には、団体内の各員は悉く同等の位を占める。蚕が繭を造るのも蜘蛛が網を張るのも、生れながらの本能によつて巧に行うのであるから、教えるとか習うとかいう必要は少しもない。それ故、蟻や蜂の団体には分業による働きの相違はあるが、誰が導くとか誰が従うとかいう様な階級の差別は全く見られぬ。これに反して哺乳類などでは、生れてから後の経験によつて次第に力が増し、生活の能率が高まつて行く故、その団体の内には無経験な若者から経験に富んだ年長者まで幾通りもの階段がある。而して斯様な団体を最も高い能率で働かせるには、団体中の最も経験に富んだ一疋を大将に定め、総ての者をして絶対にその命令に服従せしめるに限る。若しも哺乳類が昆虫類の真似をして平等型の団体を造つたとすれば、各自はその有する経験だけの働きより出来ず、しかも団体内には何時も、甚だ経験に乏しい若者が多数に存するを免れぬから、団体の能力の総量は勢い頗る低からざるを得ない。然るに若しも団体内で最も経験に富んだ一疋を大将と仰ぎ、総ての者が絶対にその命令に従うこととすれば、大将が長い年月の間に得た貴重な経験は単に大将一疋に利用せられるばかりではなく、全団体の利益のために利用せられることになるから、能率を進める上に、この位有効なことはない、されば、生後の経験によつて各自の戦闘能力が次第に増進する様な種類の動物が団体生活を営む場合には、団体内で最も経験に富んだ

一疋を大将として戴く階級型の制度を採用するのが最も得策であるが、猿の団体では実際この制度が行われて居るのである。



以上述べた通り猿の団体には協力一致の精神が発達し、服従性が盛んであつて、一疋の大将を上いただに戴いて絶対にその命令に従うて居るが、これ等は何れも団体間の生存競争が長い間行われたために、自然淘汰の結果として次第次第に生じたことで、今後も恐らく同じ方向に進み行くであろう。

三 原始時代の人類

次に原始時代の人類は如何なる状態にあつたかと考えるに、これは多分猿類と相似たものであつたに違いない。最早遠い昔に過ぎ去つたこと故、直接に調べることは無論出来ぬが、貝塚から掘り出した遺物や、現今の野蛮人の生活状態から推して或る程度までは察することが出来よう。石斧や土器が一ヶ所から沢山に出る所を見ると、団体生活を営んでいたことは確であるが、また今日の最下等の野蛮人の状態から考えると余り大きな団体は作らなかつたらしい。先ず普通の猿類の団体位の所であつたろうと思われる。而して各団体には一人の酋長しゅうちやうがあつて、無上の権威を振り、他の者は総てその命令に服して居た。このことは猿の団体や野蛮人の蕃社に比較して見ても知れるが、尚、理論的に考えても斯くあるべき筈である。即ち人類も猿と同じく、各自、生後の経験によつて一步一步戦闘能力を増して行く動物である以上は、その団体は当然、階級型に属するに定まつて居る。されば原始時代の人類の団体生活は、大体において猿類に似たものであると考えて大きな間違いはなからう。

◇ 原始時代の人類が猿類と異なった最も著しい点は、言語を有することと道具を用いることである。これは、その後に人類が猿類と頗る異なつた生活をする様になつた主な原因であるが、初期においては余り甚だしい相違を生ずるには至らぬ。何故というに、猿にも種々の鳴き声があつて嬉しい時、悲しい時、怒つた時、誤る時には、それぞれ音声の違い、聞く者にその意味が通ずるから、猿にも一種の言語があるといえる。また、猿の団体が戦うときには、皆手頃な石を拾うて投げ合うから、既に道具を用い始めて居るのである。されば原人と猿との相違は、僅に言語や道具の発達の程度に少しの差があるだけに過ぎなかつた故、其生活の状態も大同小異であつたものと見做さねばならぬ。而して斯様な生活は随分長く続いたことであろう。人類が火を用い始めたことは、人類らしい生活をする発端であつたが、その以前に何十万年も斯様な状態でも過ごしたであろう。また、青銅や鉄などの金属を自由に使うことは文明の端緒であつたが、それまでには更に何万年も掛かつたであろう。この長い年月の間に原人の団体は生存のために絶えず競争し、適する団体は勝つて生き残り、適せぬ団体は敗けて亡び失せ、自然淘汰の結果として、協力一致の団体精神と、一人の酋長に對する絶対服従の性質とは次第次第に発達し來つたことと思われる。

◇ この時代の酋長は無論猿の団体における大将と同じく、酋長たるべき實力を十分に備えて居らねばならぬ。他の者が甘んじて酋長に服従するのは、一は酋長に服従することは団体のために有利であり、延いては自分のためにも有利であることを十分に信じて居るからである。この事は多数の人間が一人を頭に戴き、力を協わせて仕事をする場合には何時でも必要なことで、現に漁業場で何十人かの漁夫が何艘かの船に

乗つて一の仕事に従事するときには、必ず一人の親方があつて、総ての者は絶対に彼の命令に服従し、親方が懐手をしながら、顎で指図すると、若い者は皆彼の手足の如くによく働く。親方は若い時からの長年の経験によつて如何にすれば仕事が一番よく成功するかを知つて居る故、彼の命令に従うことは皆の者の利益であり、若しも親方が指図して呉れねば到底それだけの利益は得られぬ。原人の酋長もこれと同じ理窟で、実際酋長たるべき実力を備えたものでなければ酋長には成れぬ。されば酋長が死んだ場合には、団体の内で最も秀でた者が直に後を継いで酋長と成り、たとえ前酋長の子でも弟でも実力がなければ、勿論酋長とは成れず、他の者と同様に新酋長に仕えねばならぬ。

また一人の酋長が自身で直接に全部を統轄する間は団体は或る制限を超えて大きくなることは出来ぬ。これは猿の団体でも同様であるが、団体が余り大きくなると、指揮者の命令が全部に行き届かず到底一人の酋長では持ち切れぬ様になる。「大男総身に智恵が廻り兼ね」という句があるが、原人の団体も大きく成り過ぎると全部の統一が欠け、新たな酋長の候補者が現れて忽ち二分するを免れぬ。これは恰もアマーバが或る程度まで成長すると、次には必ず分裂して二疋になると同じである。一つの巢に住む蜜蜂の数が余りに多くなると、旧女王は働蜂の一部を引き連れて巢から飛び出し更に新たな巢を造るが、原人の団体でも、この様な分封が始終行われたであろう。

団体の大きさが一定の制限を超えなかつたことと、酋長が実力本位の一代制であつたことは原始時代における人類の団体生活の特徴であつた。

四 団体の発達

原人が猿と異なる点は言語を有すること、道具を用いることであるが、これ等が余り発達せぬ間は前に述べた通り、略猿類と同様の生活状態に止まっていた。然るに人類の団体と団体とが戦うに当っては何れも言語と道具とを用い、その進んだものほど勝を得る見込が多いから、長い間には両方共に段々進歩した。而して、言語や道具が進歩するに随い、人類の団体と猿の団体との間に次第次第に著しい相異が現われて来た。



原人の団体が一定の大きさ以上に成り得ぬのは、一人の酋長が自身で直接に統御し得る人数に際限があるからであつたが、言語が発達すると、これによつて自分の意志をいい現し、他人にこれを取り継がせることが出来る。即ち酋長は部下の中から適當と認める者を選び、これに自身の意志を伝えて命令を取継がしめることが出来るから、団体は前よりは数倍大きくなつても、差支ないことに成る。数名の部下の者が手分けしても到底直接に統御し切れぬ程の大きさに達した場合には、部下の者等は更にそのまた部下の内から適當な者を選び命令を伝えしめることが出来る。斯様にして、酋長の命令を部下がまたその部下に取継いで伝えさせることにすれば、団体が如何に大きくなつても、一人の命令が全部に漏れなく伝わることになる。また道具が発達して通信や運搬が前に比べて容易になれば、一人の命令の下に大勢の人間を動かす事も困難でなくなる。昔から衆寡敵せずというて、他の条件が総べて同一である場合には、人数の多い団体の方が必ず人数の少い団体よりは強いに定まつているから、多くの団体が相対立して互に競争する際には、大きさに就いても当然競争を免れぬ筈であるが、前にも述べた通り、原始時代には団体の大きさに一定の制限があるために、この方面の競争は決して劇しくはならぬ。然るに言語と道具とが発達して、この制限が除かれた以上は、各団体は敵なる団体に負けぬためには、大きさに對しても敵に劣らぬ様に努めねばならぬ。敵団体に比

べて自分の団体の人数が遙に劣る様では非常に心細いから有ゆる方法を講じて我団体を大きくせねばならぬが、それには自然の繁殖による人口の増加だけでは到底間に合わず、附近の団体を併呑して速かに自分の団体を大きくしようと努めるに至る。斯くして人類の団体の間には征服の競争が続ぎ、その結果として、団体の数は次第に減じ、各団体の大きさは夫だけ増して行く。その間には共同の大敵を前に控えたために、二の団体が合意的に聯盟する事も勿論ある。団体の大きさが増せば、それに伴うて酋長の位も次第に上つて、初め蕃社の頭目であつたのが、村長、郡主、大名などに匹敵する幾多の階段を経て終に王と称するに至り、此処に王国と名づける大きな団体が出来上る。



団体が大きくなつて、酋長が直接に命令を下さぬ様になると、猿の団体には嘗て見られぬ新な事情が生ずる。初めは真に実力を有する酋長が命令を下し、輔佐の者は単にこれを取り継ぐだけであるが、実際に人民に触れるのは輔佐の者だけである故、若しも実力を有する酋長から出たと同様の命令を、輔佐の者が自身の発案で、酋長からとしていい渡せば、それでも、充分に治まつて行く。斯様な次第で後に至つては、直接に人民を指揮する者さえ実力を備えて居れば宜しい事になり、それより上に位して、間接に命令を下す階級のものは、必ずしも実力を備えるには及ばぬ。長い間に服従性が充分に発達し來つた人民は、段を隔てて上に位する者に対しては、ただ尊敬することを知らただけで決してこれを評価する如き失礼なことを敢てせぬ故、実力の有無は余り問題にならぬ。団体が大きくなつて、司配する側が多人数になつてからは、治者は全体として被治者の全体を統轄し得ればよいのであるから、必ずしもその一人一人が悉く優れた実力を備えるを要せぬ、特に被治者とは直接に触れることのない上級の治者には、他に勝つた実力を有する必要はな

い。団体の小さかった時代には嚴重に實力本位であつた酋長も、団体が大きくなつた後は、實力の有無にかかわらず務まる様になつた。



言語や道具が進歩して、団体が大きくなる間に、脳の働きの副産物として宗教や哲学が生まれた。宗教や哲学のことを論ずるのはこの文の主意でないから詳しいことは略するが、言語が発達すれば色々のことを考へるようになり、疑うて掛ければ哲学が生じ、信じて掛ければ宗教が生じた。人間は肉体と靈魂とから成り立ち、肉体は死んでも靈魂は何時まで残るといふ信仰が一般に弘まると、これに基いた風俗習慣が行われる様になる。例えば、酋長が死んでも、その靈魂が生き残つて自分等の上に立つてゐると思へば、有がたくもあり、また恐ろしくもあり、生きてゐる中に命じて置いたことを若し実行せねば如何なる崇りに遇うかも知れぬとの心配から、その子を後継者として酋長に仰でという様なことも行われる。實力本位の時代には、たとえ酋長の子でも衆を率ゐるに足るだけの實力が無ければ到底酋長となることは出来ぬが、団体が大きくなり、實力はなくとも酋長は務まるという様な時代になると、酋長を世襲的にすることが可能となり、其所へ宗教的信仰が加わると、酋長を世襲的にするといふ制度が確になる。大きな団体では司配する側の人数だけでも、非常に大勢で、それが恰も雛段の如くに最上から最下まで沢山の階段に分れ、最上の一人を初めとして、上の段ほど人数が少く、下の段ほど人数が多い。その中で真に實力本位とする必要のあるものはただ一部だけであつて、上の部に位する者は皆、世襲的としても務まるのである。されば酋長が世襲的となると同じく、部下も次第に世襲的となるが、酋長の出世したものを王と名づけるならば、これ等は即ち世襲貴族である。かくして、世襲の王と、世襲の貴族と、世襲制度の恭なさを説く御用宗教と

の三つが揃うた完全な王国が出来上った。

五 世襲王国と団体的精神

以上の如き世襲的の王国は、人類の団体が大きくなれば自然に斯く出来上るべき性質のもので、階級型の団体生活の形式としてはこれより以上のものは有り得ない。原始時代から長い間の自然淘汰によって次第に養成せられ来たった団体的精神と絶対服従性とがそのまま続くものとすれば、世襲王国では実に理想通りの団体生活が行われる、団体的精神とは何事にも団体全部の利害を第一に考え、自分一身のことなどは少しも顧みぬという精神であるが、この精神が旺盛であれば、上に位する者の発する命令は何時も国の利益になることのみであるから、下の者がこれに対して些の不服を感ずる訳もない。また絶対服従の性質が誰にも備わつてあれば、全国の者が王一人の意志に従うて動作するから、少しも統一に欠ける所がなく、一国が恰も一人の如くに働ける。これは平時にも戦争の折にも非常に有利なことである。全国が司配する者と司配せられる者との二層に分れ、司配する者の中には最上の王から最下の小役人まで雛段の如くに数多くの階級があり、各階級の者は、その上の級の者には絶対に服従し、下の級の者からは絶対に服従せられると定まつておれば、何所にも矛盾や衝突の生ずる氣遣いがなく、団体生活としては実に模範的のものといわねばならぬ。



斯様な王国では王の命令に従うことは即ち国の利益のために働くことに当る故、王に忠義を尽す事と国を愛することとは同一である。王のために命を捨てることは即ち国のために命を捨てることを意味する。総ての階級が世襲的であるから、家というものが非常に重く見られ、何よりも系図が大切で、各個人はその当人

の有する技量よりも、如何なる先祖から降つたかによつて価を附けられる。社会の全部が階級的に仕組まれ、王を除いては、何の階級にも、これに命令を下すべき上の階級があるから、生活とは即ち上の命令に従うことと心得て、王の無い国が有ろうなどは夢にも想像せぬ。誰にも身分が定まつてあり、一つ昇れば非常に喜ぶから、階級を進めることは一等の賞与であり、階級の高いことは何よりの名誉である。階級を示すための肩書は最も大切であつて、人の値は全く肩書きによつて定まる。而して誰もが肩書を貴めば、肩書きを得るために人々が一生懸命に働くから結局は、国が進歩することになる。



また斯様な王国では何事でも王の意志によつて出来るから、若しも王が学問や芸術を奨励すれば、これ等のものは著しく進歩する。大学を造るとか学士院を設けるとかして王が保護すれば学者は暮しに追われることなく、専ら学問に従事することが出来るから、学問は無進歩する、芸術の方もこれと同様で、王の御抱えとなれば、食う方の心配なしに立派な作品を製することが出来る。宗教も国教として王の保護を受ければ大に盛んになつて、一人の不信者もない状態に立ち至るであろう。階級制の世の中では学者でも芸術家でも僧侶でも無論多くの階級があり、王から貰うたそれぞれの肩書きによつて世間からはそれぞれ尊敬せられる。一言でいえば、独裁の王国は団体生活の形式としては実に立派なものであつて、それが長く続けば、燦爛たる文明を生ずべき可能性を備えて居る。但しこれは、団体的精神や絶対服従の性質が何時までも継続するものと仮定した上のことである。



然らば実際においては如何というに、立派な王国が出来る頃には団体的精神も絶対服従の性質も既にそ

そろと退化し始めている。前にも述べた通り、これ等の性質は階級型の団体生活に欠くべからざるものとして、自然淘汰によつて養成せられたものである。小さな団体が数多く並び存して、互に劇しく生存競争を行っていた原始時代には適する団体だけが勝て生き残り、適せぬ団体は負けて亡び失せて、自然の淘汰が行われたが、その後団体が次第に大きくなるに従い、この事が段々行われ難くなり、団体が益々大きく成つてからは団体間の自然淘汰は全く止んで了うた。所が、自然淘汰が止めば、その時まで自然淘汰によつて養成せられ、または支えられ来つた性質が直に退化し始めることは、生物界に通じた規則であつて、飛ぶ必要のない所に住む鳥の翼が小さくなつたのも、真闇な洞穴内に住む魚の眼が消失したのも皆その例に過ぎぬ。協力一致の団体精神や、その方便たる絶対服従の性質も、この規則に洩れず、団体間の自然淘汰が止んでからは次第に退化し来つたが、これ等の性質が退化しては、さしも見事な世襲的の独裁王国にも至る所に破綻の生ずるを免れなかつた。

六 服従性の退化

団体的精神が旺盛である間は、王でも、その部下でも、全く国のためのみを思うて居る故、その發する命令は総て国の利益となる事ばかりで、少しも利己的の分子が加わらぬ。然るにこの精神が退化すると、国の事などは第二に置き、先ず自身の慾を満たそうと図り、その占め来つた有力な位地を利用して人民に無理なことを強い始める。人民は長い間の絶対服従に慣れて居る故、最初の中は無理な命令にも柔順に従うて居るが、服従性が或る程度まで退化すると到底我慢が出来なくなり、上の者に対して反抗し始める。斯くして司配する階級と司配せられたる階級との間に戦いが始まるが、この戦いは団体的精神や服従性が退化すればするほ

ど、劇しく成るべき性質のもので、容易なことでは調停の望みがない。また服従性が退化すると、物の考え方が段々変つて来て、今まで当然と思つて居たことが俄に不合理に見え始める。例えば自分の貧しい暮しに比べて上の者が甚だしい豪華を極めて居ても、身分が違ふから斯くあるべき筈と思つて今までは辛棒して居たのが、如何にも馬鹿げた様に見えて来る、裸にして比べたら智慧でも腕力でも我の方が優つて居るのに、何故、彼は遊びながら斯く贅沢に暮し、我は何故日々の生活のためにこの様に苦しまねばならぬか。我々の作つたパンを食わせ、我々の織つた着物を着せて我々が養つて居る彼等に、何故我々は極度の尊敬を払つて、その命令に服従せねばならぬか。服従性が退化すると、斯様な問題が頻りに胸に浮んで来るが、如何に考えてもその理由が見出されぬから、時の社会制度を不条理極まるものと断定し、これを覆さねば社会は進歩せぬと堅く信ずる者も出て来る。人民の心がこの様に変つて来ては、上の者がこれを治めて行くことは頗る困難と成らざるを得ない、服従性が盛んであつた頃にはよく治まつたのが後に至つて治め難く成つたのである故、上の者は成るべく人民の考え方を昔のままに留めさせて置こうと努めるが、服従性の退化する原因が依然として存する以上は此努力も結局は無効である。



団体的精神が退化して国王やその部下が勝手なことを為し始めると、勢い国王と人民との利害が衝突し、国の政治を国王一人に委せて置いては何事を仕出かすか分らぬとの懸念から、人民は国王に迫つて、国王と雖も、これだけの規則は決して犯さぬという約束をさせようとする。国王は自分の権限を狭められることは無論好まぬから、初めは斯様な申し出を拒絶するが、多勢に無勢で終に余儀なくこれを承諾する。斯くして出来たものが斯様な国の所謂憲法であるから、立憲王国なるものは、憲法も何もなくてよく治まつた専制王国か

ら見れば、団体的精神が余程退化した後、初めて出来たものである。斯くして憲法だけは出来ても、昔からの階級制度が其ままに行われて居る間は、特殊の利益を獲て居る上の階級と、不利益の位地に立つ下の階級との争いは中々治まらず、上の階級は何所までも従来^{どこ}の制度を保存することに努め、下の階級は自分に不利益な制度は成るべく速かにこれを撤廃しよう^{すみや}と図る。この争いは服従性の退化と共に次第に激しくなり、双方ともに全力を尽して戦い続けるが、全体から見れば、特権階級はいうに足らぬほどの少数である故、多勢に無勢で到底叶わず、一步一步退いて、終には国王までがその位を保つことが出来ぬ様になって、天下は一人の天下にあらず、天下は天下の天下なりという状態に立ち至る。凡そ共和国なるものは、斯様な筋道を通じて、出来たものであるから、全く服従性の退化したために生じた結果である。

七 共和国の出現

さて共和国になつたら、それで治まるかというに、共和政治を要求するまでに服従性の退化した人間は、それと同時に団体的精神も退化して居る故、如何に制度ばかりを改めて見ても、到底完全な団体生活は出来ぬ。団体的精神とは生れながらに協力一致せずには居られぬという精神であるが、この精神が退化しては、団体の各部分の間に争いが絶えず、勝つて権力を握った仲間は得意であるが、他の者等は大に不平である故、折を見てこれを倒そうと努める。これは単に全国の政権に対してのみではなく、何れの方面も同様であるから、団体内は争いで満たされ、競争に勝った者が得と定まれば、競争は益々激しくなるが、斯くては理想的の団体生活からは次第に遠ざかり行くばかりである。



昔からの特権階級は革命によって倒し得たとしても、人類の社会的生活の状態が従来の通りであると、更に別方面の特権階級が現れて、多数の者はその奴隷となることを余儀なくせられる。道具を用いることは人類が他の動物と異なる点であるが、道具が発達すると貧富の間に甚だしい差が生じ、貧者は富者のために非常に圧迫せられるに至る。団体的精神が退化して各個人は既に全く利己的になつて居るから、富者は富の力によつて更に富を増そうと努め、そのため富者は貧者を極度まで虐待する。然るに貧者の方も既に大部分は昔の服従性を失うて居る故、決して富者の虐待を堪えては居ず、徒党を組んで必ずこれに反抗する。昔の特権階級が倒れたのは、多少その時節が到来したために自然に倒れた如き観があるが、貧富の争いでは、中々その様に簡単には行かず、貧者が長く富者を苦しめようと掛ければ、自分も苦しくて共倒れとなる虞がある、されば、この問題を解決するには、財産に関する社会の仕組を根柢から造り換えるの外はないが、斯くして見たら、都合のよい仕組が出来るか否かは何とも答えられぬ。団体的精神を失うた人間が多数に集まつて団体生活を営んで居るのであるから、仕組だけを如何に改めて見ても、到底完全なものにはならぬ。幾分かでも改良が出来れば、それで満足するの外はない。今後如何なる社会改良策が講ぜられようとも、各個人の持つて生れる協力一致の団体的精神が相変らず退化して行く以上は、理想的の団体生活は何時まで経ても恐らく実現せられぬであらう。



以上述べた通り人類の団体生活の歴史の中で最も完全な団体生活の行われて居たのは初期の王国時代であつて、それから追々、団体的精神と服従性との退化により社会の仕組が次第に変化して、終に今日の共和国までに成つたのである。初期の王国時代は原始時代から絶えず発達し来つた団体的精神と服従性を受けて、団

体がよく纏まり、王の命令に従うて国民が一致して働いた。その後、団体的精神や服従性の退化したために、団体の締りが悪くなり、所々に亀裂を生じたので、これを防ぐために、道徳や法律が初めて造られた。自由の叫び声が聞える様になったのは、それより遙に後である。更に王国時代の末期に近づくと、新旧思想の衝突が激しくなり、国王の部下は全力を尽して新思想の撲滅に努めたが、服従性の退化に基く時代の変化には如何とも抵抗することが出来ず、終に共和国の出現を見るに至つたのである。ヨーロッパやアメリカの数多い共和国は一国毎にその歴史は異なるが、猿の群から今日までに至る長い経過を一口に約めていえば恐らく以上の如くであつたらうと考える。

八 歴史と生物学的の見方との一致

序にいうて置くべきは服従性の退化に伴うて歴史家自身の頭も變つて行くことである。服従性の盛んな時代には記録に遺し置くべき価値のある人間はただ上に位する少数の者だけの如くに感ぜられ、下に位する多数の人間は有つても無くても同様に思われた。それ故、その頃の歴史は恰も少数の人間の人物列伝の如き体裁のもので、誰は何時、何所で生れて、何を為て、何時死んだという様なことが詳しく記してある。然るに、服従性が退化して来ると、歴史家の物の考え方も次第に變つて来て、上に立つ少数の者だけが人間である訳ではない、エネルギーの総量からいえば、下に位する多数の者の方が何倍多いか分らぬ。されば歴史研究の対象は個々の人物ではなく、人類の団体全部の変遷でなければならぬことに気が附いて来る。凡そ如何なる事件でも、その生ずるには必ず生ずべき原因がある。また或る事件の生ずべき事情が迫つて来れば、早晚必ずそれが生ずる、恰も春が来て氣候が温かになれば、花が必ず咲き、秋が来て氣候が寒くなれば、葉が必ず

落ちるのと同様である、併し、何月何日から花が咲き始めるか、何の枝から葉が落ち始めるかは、其の時の事情によつて無論一様ではない。同じ花でも南国では早く咲き北国では晩く咲く。垣一重を隔てた隣り同志の庭でも日当りや風通しが違えば、左の枝から葉の落ち始める樹もあり、右の枝から葉の落ち始める樹もある。何れにしても花が咲くべき時が来れば花が咲き、葉の落ちるべき時が来れば葉が落ちるのであるから、斯様な相違は全体から見れば実に些細なことである。人類の団体生活の変遷に於いてもこれと同様で、その場所場所で違ふ様な一個一個の事件は全部を見渡すに當つては左まで重大視するには及ばぬ。例えば王朝を倒して共和国を起した叛軍の大將が誰であつたかという様なことは従来すいぶの歴史では頗る重大な事項であつたが、歴史家の頭が變つて、王朝が倒れたのは、その当然倒れるべき時期が到来したためであると考える様になると、叛軍の大將が何という個人であつたかは、左程重大な問題ではなくなる。斯様なことを詳しく調べて居るのは、恰もどの花が何時何分に咲いたとか、どの枝から一番先に葉が落ちたとかいうことを丁寧に調べて、春が来れば花が咲き、秋が来れば葉が落ちるといふ大きな点を忘れて居る様なものである。或る事件の生ずべき原因があり、その生ずべき時期が迫つて来れば、甲某が出なければ、必ず乙某が出て、何時か、何所かどこでその事件が起らずには済まぬ。斯様な考えを以て、昔から今日までの人類の各団体の変遷を見比べ、事物の大小輕重をよく識別し、時勢が大きく変化し行く眞の原因は何であるかを探り求めたならば、歴史の研究は全く生物学的の見方と一致するに至るであらう。

(大正十三年三月)

- 『丘浅次郎集』（「近代日本思想大系」九、筑摩書房、一九七四年九月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvi_{ps}pdfxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。